

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ビザンツ文学余滴第5回（通算第6回）：ビザンツ末期の文人プレトンの建白書その一
Author(s)	戸田, 聡
Citation	プロピレア, 27 : 75 - 97
Issue Date	2021-12-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051905
Right	Copyright (c) 2021 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



ビザンツ文学余滴 第5回（通算第6回）

—— ビザンツ末期の文人プレトンの建白書その一 ——

戸田 聡

北海道大学准教授

翻訳序

今回、ビザンツ末期の文人プレトン（1452年没）の著作を選ぶこととなったきっかけは、筆者自身が或る研究計画にかかわることとなったからである。正義論をめぐるものらしいのだが、そして正義論なるものについては既に先行研究¹もあるようなのだが、とはいえその先行研究ではイスラム教もビザンツも扱われておらず、そこで、古代から現代に至るまで、かつイスラム教もビザンツも含んだ形で正義論を扱う、というのが当の研究計画の趣旨らしい。そこで、ビザンツとの関連で（なぜか）筆者にも声がかかったという次第である。

ところで、前近代には社会に関する系統的な教説（学問、とまで言わないとしても）は存在しない、というのが、筆者の或る種牢固たる先入見である。などと言うとたちまち各方面（？）から、例えば『アテナイ人の国制』を始めとするアリストテレスの諸々の教説が反証として突きつけられるかもしれない。実際それは充分な反証ではある。だが、学部時代に「経済学史」に関する授業の中でいわゆるマル経（この言葉は今や疾うに死語であるのだろうか）の教師から、近代になって資本主義の時代になり経済が或る種の自律性を獲得したのに照応して経済学という学問も成立した、などという図式（正確にこの言葉どおりの言い方かどうかは、今さら確認していない）を教え込まれており、当方としてはこの「洗脳」に今なお若干の説得力を感じている、ということは認めざるをえない。そしてそもそも、前近代の著作の中で、社会に関するまとまった記述なるものを目にしたことがなかった、ということもある。

¹ 山口雅広・藤本温編『西洋中世の正義論』、晃洋書房、2020年。

ところが今回、以下で訳出するプレトンの著作を目にして、己れの先入見は根本的に修正されねばならないと悟った。しかもなんと、個人的には大変お世話になった故渡邊金一先生が、当のプレトンの著作の日本語訳を發表しておられるのではないか（渡邊先生、ごめんなさい！）。かくて、以下の拙文（翻訳を含む）は *mea culpa* としての意味も持つことを予め白状しておかねばならない。

例によって例のごとく、プレトンなる人物に関する己れの無知をふさぐ意味で、まずは我が敬愛するベック先生の『ビザンツ世界論』（戸田聡訳。知泉書館、2014年刊）中のプレトンに関する言及を見ておきたい。

「プセロスやプレトンがプラトンを古典作家として見ているのに劣らない仕方、トーマス・マンはゲーテを古典作家として見ている」（161頁）。

「そしてビザンツ時代の末期にはゲオルギオス・ゲミストス・プレトンのような、聖職者家庭の子弟で、コンスタンティノーブルの高位聖職者をモデルとして育てられた人物がいる。ここにおいてついに堪忍袋の緒は切れるばかりになり、今や人でなくシステムが、然り、信仰それ自体が、問題となるのである」（217-218頁）。

「千年後、コンスタンティノーブルとミストラスの陥落の少し前に、哲学者ゲオルギオス・ゲミストス・プレトンがいる。彼は社会の生活への貢献を *λειτουργεῖν τῷ κοινῷ* と呼んでおり、彼の考えではまさにそういう貢献は修道士によっては果たされない。修道士たちは「哲学的に」生きていると称するが、現実には彼らは、社会にとって有害な連中、無用の怠け者である。興味深い仕方、プレトンは同時代の修道士たちを、修道院における労働に決定的な価値を置いた古代の修道院創建者——たぶんバシレイオスが念頭にあるだろう——の理想に即して評価する。曰く、この理想はもはやどこにもないのだ、と。この批判がどれほど根底的だったにせよ、我々の問題設定から見て、それは方法的に相対化されねばならない。なぜなら、他の批判者たちと異なりプレトンは、ビザンツ的生のこの認められた標準の枠内で修道制を見るのではなく、むしろ修道士もろとも、この標準をも決定的に疑問視しているからである」（337頁）。

「異教への非難は、続く諸世紀には特に文人への非難として再三見られる。K・サタスは数十ページを使って、ビザンツの全時代を通じて流れる異教的底流 [の存在] を立証しようと試みた。この試みはこの形では、またこういう一般化においては、失敗だとみなされねばならない。それにもかかわらず、それら非難を個々どう評価すべきか、という問いはなお残る。少なからぬ場合、そ

れは古代ギリシア哲学からの借用にほかならず（例えばヨアンネス・イタロスの場合）、無論そういう借用は、正教と矛盾する教説（例えば世界の永遠性に関する見方など）に帰着した。他の場合には、異教的な教養財への取り組みが考えられてよく、一面ではそれは、気どった古典主義的道楽（及びそれに合致した語り方）だったかもしれない、だが他面ではたぶん、単なる遊戯以上でありキリスト教的思想財にいかなる余地も残さないといった、神話の世界への沈潜だったろう。これらすべては仮説だが、それでも、そういう可能性は存在したように見える。さもなければなぜ、その後十四世紀末・十五世紀初頭の頃、異教が、ゲオルギオス・ゲミストス・プレトンという人物において、自覚的に、かつ遊び的な外観などなしに、突如頭をもたげて、在来のビザンツ的世界観への総攻撃を始めたかが、説明しがたいからである。その際補足すべきは、プレトンはこの時代について挙げられる唯一の人物ではなかった、ということである」（406-407頁）。

「「神話」自体について短く指摘を一つ。ここでは、ビザンツの哲学者の最後の人物である哲学者ゲオルギオス・ゲミストス・プレトンが、一番端の風当たりの強い場所に立っている——が、彼は孤立しているのではない。彼はイスラム教のいくつかの倫理的観念から強い印象を受け、その結果彼はそれらをキリスト教の価値観と対置させており、プレトンはまた、かのいささか雑然とした領域、かの両面価値的なゾーン、すなわち、キリスト者の中で古代の様式美以上のものに（気がとがめながらも）熱中し、しかし自分のキリスト教〔信仰〕を投げ捨てることはしなかった、そういう場から、外に出ている。彼はキリスト教を投げ捨てたのである。彼は帝国の存続のためにそれを放棄した。なぜなら彼はただ一人、哲学的に防護されヘイマルメネー（すなわち運命思想）によって規定された異教への回帰のみが、〔帝国存続の〕保証だと思ったからである。それでも、これは単に理性的な考察であるだけではない。プレトンは、一箇の宗教を創設したい、復権された諸神格のヒエラルヒーに関して思弁をめぐらしたい、またそれだけでなく、それらを熱狂的な讃歌を以て賛美したいのである。（推定されるように）徹頭徹尾正教的な共同体の中でこういう反応は、単に偶然ではありえない、というテーゼが妥当であるなら、その場合にお勧めなのは、私が彼の時代より以前に確認可能だと思ったいくつもの神話的特徴を、仔細に調べてみることである」（484頁）。

翻訳の底本としたのは Σπ. Π. Λάμπρου *Παλαιολόγεια καὶ Πελοποννησιακὰ* (sic), vol. 4, Ἐν Ἀθήναις, 1930, pp. 113-135 である。ただ、所々で誤植が目につき、その際には、これより古い校訂版である A. ELLISSEN, *Analekten der mittel- und neugriechischen Literatur*, 4. Theil: *Byzantinische Paralipomena. Timarion. Mazaris. Plethon*, 2. Abtheilung: *Plethon's Denkschriften über den Peloponnes*, Leipzig: Otto Wigand, 1860 をも参照した(ギリシア語原文は pp. 60-84 に、ドイツ語訳は pp. 105-130 に、それぞれ見られる)。概して Ellissen のほうが正確であり、やはり厳密さ・正確さにかけてはドイツ人恐るべし、である。

上で触れた渡邊先生の日本語訳の典拠は渡辺金一「『法の精神』の祖型：一ビザンツ文人のペレストロイカ建白書」、『一橋大学社会科学古典資料センターStudy Series』14、1987 年である(URL は <http://hdl.handle.net/10086/25494>)。今回訳出した際に同訳を参照して得た印象を率直に述べると、渡邊先生の訳文は原文に逐語的に対応しているわけでは必ずしもなく、部分的にはたぶん、Ellissen の独訳からの重訳も含まれているのではないかと思われる(綿密に確認したわけではないが)。とはいえ、重訳だからと言って切って捨てるにはあまりに惜しい渡邊先生の名調子が随所に見られる。これはこれで一個の作品だとして敬意を表すべきだろう、と筆者自身は思う。その他近代語訳としては W. BLUM (transl) *Georgios Gemistos Plethon. Politik, Philosophie und Rhetorik im spätbyzantinischen Reich (1355-1452)* (Bibliothek der griechischen Literatur, 25), Stuttgart: Anton Hiersemann, 1988, pp. 151-169 をも参照した。

訳文中に付した番号は、Ellissen のドイツ語訳に付されたのと同一である(なお、Blum の独訳で内容区分のために使われている番号は Ellissen の番号とは異なる)。というのは、渡邊氏の訳で使われているのが Ellissen の番号であり、拙訳と渡邊氏の訳との対照を容易にするべきだと考えたからである。但し、拙訳の改行は底本(Lampros)に従っており、したがって改行の仕方は渡邊氏の訳とは異なっている。

[] 内は原文にない言葉であり、訳者による補足を意味する。他方、() 内の言葉は原文にある言葉だが、(文意をわかりやすくするため等々) 修文上の都合で、訳者の判断により所々 () を用いることとした次第。

ペロポネソスについて君主テオドロスへのプレトンの勧告

1. [例えば] 船においては舵取りが、乗り込む者たちの安寧（舵取りの目から見て安寧と見える限りのこと）に関することすべてを取り仕切ること、[また例えば] 陣営においては同様に将軍が、従者たちの勝利に関すること[すべてを取り仕切ること]、がつねです。航海する者たち、また、戦う者たちや戦闘する者たち、いずれの人々にとってみても、勝利のためには、極小の時間であれ一人の男のもとに服させられない諸々の事柄は、[健全に] 保たれないこと[がつねです]。というのも特に、少なくとも危険が最も大きく最も尖鋭的であるこのような状況では、唯一者支配が最も安全で最も有利であるということ、我々は極めて明確に理解するからです。それにもかかわらず[一方で]、船において船乗りたちの中で、皆の安寧に帰着することどものうちの何がしか、助言すべき何がしか、を持っているとっておりまた持っていると思いたい者には、また[他方で]、陣営において兵士たちの中で同様である者には、[そういう者が] 進み出て、一方で舵取りに、他方で将軍に、思い浮かんだことどもを伝えて提言することが、劣らず許されていると我々は理解します。そして、ともあれ聞いた者たちには、当の助言を、一方で選びとることが許されており、他方で斥けること（柔和に、しかし辛辣にではなく）も許されています。つまり実際、国家 τὸ κοινόν の中で助言を行なう者にとって、皆の安寧のための思慮の何がしかを[言うことが] 自分にも相応なことだと思うかどうかというのは、ともあれ大いに許されているからです。そして実際、我々のこの都市と民族のために、万事への配慮は、おお最も神聖なる頭^{カシラ}よ、貴殿に委ねられており、そして我々のこの支配権 ἡγεμονία は、多くの皇帝にして祖先たちからお父上にしてこの[すなわち今の] 皇帝を通して貴殿へと、相続分として下ってきており、そして、万人が同意しかつなんびともあえて反対を立てない中で、貴殿ご自身（また同時に我々）に有利であるだろうと貴殿がお思いになる仕方で、我々の事柄をこの支配権によって取り仕切ることが、貴殿には許されています。

2. さて、一方で貴殿にとって事態はこのようであり、他方で我々にとっては、陸地からも海からも至るところから我々が畏を仕掛けられるべく、国事が大いなる危険の中で運ばれつつある中であって、私として付け加えるなら、自国内でも地方から蛮族（また同時に同種族）によって、そして特に今やこの近隣の蛮族[すなわちトルコ人]によって[、我々は畏を仕掛けられています]——彼らによって我々は、他の支配領域の最大部分及び最も本来的な部分を奪われ

てしまっております。彼らは昔パラパミサデス〔と呼ばれた人々だったの〕であって、フィリップスの息子アレクサンドロス及び彼と共なるギリシア人たちによって、当時インドへの通過のついでに罌を仕掛けられ負かされて、今や遙かのちに我々に対してこの懲罰を科し、〔我々が〕ギリシア人であるがゆえに、かつて企てられたことどもの幾層倍もの懲罰を科し、そして今や我々よりも幾層倍もの力を有し、我々に関して最悪のことをたくらみ、そのつど成し遂げてきております。

事情がこのようである中で、私は、共同の安寧 *σοφρῖα* に関して〔自分は〕たぶん大勢よりも多くのことを思惟していると思っているので、我々の事柄の主君であられる貴殿に以下のことども——それらによって貴殿には〔何が？〕在るだろう、我々すべてには救いがあるだろう、と私は思うのですが——を付け加えかつ提案するとしても、悪しきことをしているとは思いません。まず私は、あらゆる点で私が明らかに快樂によって説明を行なっておらず、〔私の説明の中には〕むしろごつごつしてもおり険しくもあるものが半ば見えるとしても、快樂よりもむしろ一層有益なものや一層良いものを選ぶ私をご寛恕くださるよう、貴殿にお願いするでありましょう。実際、私が見ますに、医者たちもまた、病んでいる者たちの安寧と健康のためには最も不快な食べ物や飲み物やその他の薬〔の処方〕を惜しまないのであり、〔これに対して〕少なくとも料理人たちは〔食する者たちの〕身体を、外観による快樂によってしばしばさらにだめにしています。このように、快樂は至るところで有利であるわけでは必ずしもないのであり、むしろ実際、最も不快なものによっても益を受けることは可能なのです。

3. そこで、まず思惟されねばならないのは次のことです。すなわち、個々人や諸都市や諸民族にとって、最も困難な状況の中からでも、より良いことは望みえないわけではないのです。というのも、多くの人々が、我々が今その中にいる当の状況よりもひどい状況の中から、自分たち自身を再び回復させてきたからです。つまり、アイネイアスと共なるトロイア人たちは、自分たちの祖国がアカイア人たちによって取られたので、災難に従ってフリュギアからイタリアへと運ばれて、これら以後の状況を幸運裡に進めた結果、のちに一時期サビニ人（ラケダイモン人である）と共に同じ権利でローマに住み、この都市から出立して、記憶の中にあるあらゆる支配権の中で最大にして同時に最良の支配権を有しました。ペルシア人もまた、アレクサンドロスとギリシア人とマケドニア人とに対する隷従ののち、ローマ人によってマケドニアの諸王国が廃棄さ

れたので、卑しからざる仕方での人々 [すなわちペルシア人] はともかくもバルティア人 [の時代] を経て自分たち自身を回復させ、 [それだけ] でなく、その結果、ローマ人による当時最大だった支配に対しても、継続的に戦争しました講和し、勝利しました今度は敗北し、そしてついには輝かしくも勝利し、幾世代の間ローマ人から貢納 φόρος を徴収しさえしました。4. それゆえ正しいのは、我々が自分たち自身を放棄したり、救いについて絶望したりすることではなく、むしろ自分たち自身が、恐るべき状況の中から脱出してより良い状況を希望しつつ、あらゆる熱意を以てかかもの凝視し熟慮することなのです。

[かかものとは] すなわち、状況が我々にとって何らか安全な状態になり、我々が、なしうる限り、より幸運になりより良くなる、その所以及びその方法です。

^{ボリス}都市或いは民族をより劣悪な状況から、——人間的な言い方をするなら——ともあれ堅固かつ安全に、より良い状態で取り扱うようになるためには、政体 πολιτεία を修正しつつ取り扱うよりほかの仕方はありません。というのも、諸^{ボリス}都市がうまく行く或いはまずくなるには、優れていることが確立している政体、或いは低劣なことが確立している政体、よりほかの原因はないからです。そして、たまさか運良く²もし或る^{ボリス}都市が、自らの考えに従って [うまく] ^い行っているが、不安定に [うまく行っており]、そしてそのようなことが速やかにひっくり返ることをつねとする場合、それら^{ボリス}都市はたいてい政体の卓越性によって保たれかつ賞賛されるのであり、逆に、それらの政体がまずだめになってしまうと、[それら都市は] 衰退しかつ滅びるのです。5. というのも、ギリシア人たちが共同で居住世界じゅうにおける栄光を有したのは、アンフィトリュオンの息子ヘラクレスが彼らを不法と不正義から清め、代わりに、良い秩序と徳への熱心さをもたらした、その時より以前ではないからです。ヘラクレス以前には、ギリシア人の種族はさほど栄光あるものではなく、彼らを支配していたのは、諸々の蛮族の中からやって来たよそ者の男たち、すなわちダナオスたちやカドモスたちです。ギリシアや蛮族の [地] におけるギリシア人たちの数多くの偉大なる勝利は、ヘラクレス以後のことであり、また、ラケダイモン人がギリシア人たちの支配者であることが示されたのは、リュクルゴスが彼らのかの讃えられる政体を立法したより以前ではなく、そして彼ら [ラケダイモン人] が撃たれ支配権から転落したのは、彼らが既存の政体がないがしろにしたより

² BLUM, p. 170 n. 4 は底本の Τύχην Τύχην と読み替えており、本稿も Blum の判断に従った。

以前ではありません。また彼らは、自分たち自身は当座歩兵を養っていたので、海での〔戦〕力を追求し、当時騎兵隊は、最も富裕な者たちが馬を飼い、必要時には指揮下に置かれた者〔すなわち兵士〕たちが彼ら〔最も富裕な者たち〕から与えられたような武器と共に〔馬を〕受け取るという按配であって、極めて劣悪にしか保持していませんでした。そして彼らはもはや味方の指揮を穏当な仕方では行ないませんでした。それゆえ彼らは、ピュタゴラス派の教育をついでにでなく聴講し通した男エパメイノンダスに率いられたテーバイ人たちに負けました。そしてフィリップスは、テーバイ人のもとで人質だった時に、このエパメイノンダスのもとで育てられ教育され、ギリシア人たちの支配者たることが示され、そしてこの者の息子アレクサンドロスは、同じ父であるフィリップスとさらにアリストテレスのもとで教育されたのち、ペルシア人たちから支配を取り上げて、ギリシア人たちの支配者にしてアジアの王となりました。

6. また、ローマ人たちは、政体の卓越性と共に偉大なる支配権へと至っており、彼らの状況が傾いて調子が良くなかったのは、サラセン人たちが既存の状況を揺るがしたより以前ではありませんでした。この人々〔サラセン人〕は、かつてはアラブ人たちの偉大でない一部分だったので、当座はたいていの場合ローマ人たちに服従していました。だが、それにもかかわらず彼らは、自分たち自身のいくつかの法及び新たな政体——他のいかなることのためにもうまくないとしても、少なくとも諸都市の増加と戦争の強さとのためには有用なように見える、そういういくつかの法——を立てたのち、まず同種族のアラブ人たちを自ら指揮し、次いでローマ人たちの支配領域の最も〔人口〕稠密にして最良の〔地方〕を〔ローマの支配から〕切り離し、リビアを支配し、ペルシア人たちを自分の側につけて、自分たち自身の政体に服さしめました。また、居住世界じゅうの他の多くの種族は、この人々〔すなわちサラセン人〕の法を賛嘆してそれら法を用い、何らか幸運なように見えます。そして、我々に敵対して最大に力のあるこの蛮族たち〔すなわちトルコ人〕は、これら法を用いてきたので、最大のことを成しえてきました。このように他の諸種族も（もし人が個別的に足し合わせられるのなら）、諸民族も諸都市も、より良い政体ゆえ或いはより劣悪な政体ゆえに〔自らが〕よりうまく行き、或いはよりまづくなるのを理解するでありましょう。

それゆえ、何から発してまたいかにして、我々は救われるのだろうか、また何から発してまたいかにして、我々の状況は現状よりも良くなるのだろうか、ということが熟慮されるべきであるなら、政体を修正することがなされねばな

らず、既存の状況の中の比較的低劣な状況からより優れた異なる状況へと変革することが、なされねばなりません。都市及び政体を成り立たせているものが多いので、また他方、〔成り立たせているその〕各々のものに応じて〔政体の形象化としての〕政府 πολιτεύμα はより良くもなればより劣悪にもなるので、〔それゆえ次のことが言えます。すなわち〕一方で、最も多いものの中の比較的良いものと最も時宜に適ったものによって成り立っている限りの政体、このような政体は全く以て優れた政体なのであり、他方で、同じものの中の比較的劣悪なものによって成り立っている限りの政体、そのような政体は低劣な政体なのです。

7. そこでまず、政体の第一次的な種類は三重、すなわち唯一者支配 μοναρχία、少数者支配 ὀλιγαρχία、民衆支配 δημοκρατία ですので、そして他方、これら各々のありよう（行なわれる統治がそれに応じてより良かったりより劣悪だったりする、そういうありよう）は複数的ですので、最良の思慮を行なう人々のもとでは、すべての中で唯一者支配が、最良の助言者たちと、優れたかつ有効なこれら法とを用いるゆえに、最良のものだと判断されています。そしてまず、助言者として、教育を受けた男たちのほどほどの多さが最良です。というのも、民衆とは言えば、お互いに対して傾聴せず、またその多さと、彼らの中の無教育な者たちの過剰さとのゆえに、容易には悟らず、しばしば無思慮な仕方投票を行なうからでして、また〔一方で〕、極めて少数に数えられる助言者たちは、しばしば自らの利益（善くないもの）を考慮します。他方で、片や多さの点でほどほどであり片や無教育でない、そういう助言者たちは、各自がそれぞれのことを確からしさに従って理解しそしてそれを皆の中へと持ち出し、共同の利益によって共同に導かれており、助言を行なうという点においてあらゆる面でより良くかつ極めて確かな人々であり、さらに、暮らし向きの点でほどほどであり、極めて富裕というわけでもなければ赤貧というわけでもない人々です。つまり一方の〔すなわち極めて富裕な〕人々はしばしば、富に対する愛のゆえに、何から発してどういう利益が自分たちに付け加わるだろうか、ということ以外を熟慮しないのがつねであり、他方の〔すなわち赤貧の〕人々は赤貧さのゆえに、何から発して自分たちが自らの窮境を緩和する〔ことが可能〕だろうか、ということ以外を凝視しない〔のがつねであり〕、〔これに対して〕ほどほどである人々はむしろ確かに、そのつど共同の利益のために考慮することを欲するのです。

さて、助言者たちについては以上とします。8. そして〔次に、〕諸々の優れた法とは言えば、全般的に言うならば、都市^{ボリス}の諸部分の各々や諸民族の各々に、なすべき自分たちの事柄の境界を定めつつ、〔他方で〕行動であれ身すぎ世すぎの営みであれ適切でない諸々の事柄〔を、都市^{ボリス}の諸部分或いは諸民族が行なうということ〕を阻むだろう〔、このようなものが、優れた法であります〕。ほとんどの都市^{ボリス}に於いても、第 1 のそして最も重要かつ最も多い部分・種族なのは勤勞する〔部分・種族〕でして、〔すなわち〕農夫の〔部分・種族〕、牧人の〔部分・種族〕、自ら自力で地からの産出物を得るすべての人々の〔部分・種族〕です。他方、別の〔すなわち第 2 の部分・種族〕は、これらの人々や都市^{ボリス}のその他大勢の人々に奉仕する〔部分・種族〕でして、〔すなわち〕職人の〔部分・種族〕、商人〔及び船乗り〕の〔部分・種族〕、小売商の部族、そしてもし実際何かあるならこの人々に適合する別のもの〔部分・種族〕です。すなわち一方で、人間たちが生活のために必要とする諸々の器の中の存在しないものを現実へともたらす職人たちの〔部分・種族〕、であり、他方で、過剰なもの足りないものを、一地方から他地方へのそれらの移送によって各地方に均等にする商人〔及び船乗り〕たちの〔部分・種族〕、であり——商人たちは〔これによって〕自分たちをこの奉仕〔する部分・種族という分類〕へと位置づけていると言えます、なぜなら、自ら働く人々〔すなわち第 1 の部分・種族〕は、自分たちの状況に専心することによって、〔他のことをする〕暇がないからです——、また他方で、自ら働く人々や何人かの商人たちからまとまったものを購入して、必要なもの（の一部）を各々の人々に、必要のために、彼らが必要な時に必要な分だけ売る小売商たちの〔部分・種族〕、です。そして、身体の壮健さを賃貸^{ちんが}してそのつど色々な人々に奉仕して生活する人々〔＝人足のたぐいか？〕がいます。9. これらに加えて、支配的な部族〔があり〕、すなわち都市^{ボリス}全体、或いは一種族、或いは（もし事情がたまさかそうであれば）複数の種族、の救済者の〔部分・種族〕、であり、また、監督者の〔部分・種族〕、であり、これらの人々の頭領〔に当たるの〕が皇帝或いは何らかの支配者なのでして、その次の位では、他の人々が他のことどもを部分的に引き受けて、種族或いは都市^{ボリス}の各々の部分を維持します——もし、その仕方に属する（？）ことのうちの何かが起きれば。というのも、「等しいものを有さねばならない」「行き過ぎてはならない」「他人の物を狙ってはならない」ということをすべての人間たちが信じるというのは可能でなく、むしろ、自ら働くことや生活のための何らか他の必要を行なうことをないがしろにして、他

の人々の労苦に固着^{きせい}する人々は存在^{なくならない}するからです。こういう人々に対しては、一方でもしそのような人々が友好的な存在〔例えば自国人〕だとみなされるなら、裁判官たちや他の役人たち〔言い換えれば警察力・司法〕が据えられたのであり、他方でもしそのような人々が敵対的な存在〔例えば敵対する国の人〕だとみなされるなら、兵士たちや兵士たちを「掌^{つかさど}」るような役人たち〔言い換えれば軍事力〕が据えられました。全体に対する監督に従事するこれらの人々のために、必要品が〔これらの人々の仕事自体からとは〕別なところから必要だったので、特に自ら働く各々の人々によって貢納が担われることが定められました。それら貢納は、共同の監督者たちにとって食いぶちであり、また何らか報酬であり同時に監督に対するほうびでもあります。そしてこれが貢納の由来です。

10. 都市^{ポリス}における、本性に即したこれら第一次的な種族は 3 つでして、それら各々〔の種族〕の諸々の営みや諸々の行動は固有なものであり、そして優れた法は、このこと自体の境界を定めるでしょう。〔このこととは〕すなわち、各々の種族は自らのことを行なうということ、他の種族と他の営み・行動を交換しないということ、手始めに例えば、役人たちは奉仕する種族のいかなることも営まないということ、です。というのも、奉仕はたぶん公職 ἀρχή と極めて反対であるからであり、奉仕する営みは、我々が言ったように〔公職とは〕別であり、商業も、また小売商業も、別なのです。優れた法は役人に対しては、商人たることは許されないこと、小売商たることも許されないこと、自由ならざる他のいかなることに触れるのも許されないこと、と境界を定めるでしょう。また、兵士たちは多くの人々から区別されていること、そして全く、救済する者たちは救済される者たちから〔区別されていること〕、そして前者〔すなわち兵士たち〕は、あらゆる貢納を免除され、軍務に就いて多くの人々のために危険に直面すること、また後者〔すなわち兵士と役人を除く多くの人々〕は、自分たちの事柄に専心しつつ、力〔すなわち担税力〕に対して充分でかつ同時に重くない何ほどの貢納を担うこと、役人たちと兵士たちの選り抜きの人々々々に対しては食いぶちを〔担うこと〕、と境界を定めるでしょう。軍隊の大宗、及び最も重要な部分は、同種族にして同族であって決してよそ者でないこと〔と、優れた法は境界を定めるでしょう〕。というのも、よそ者の大部分は信頼に値せず、しばしば変転して、救済者や監督者でなく敵となることがつねだからであり、他方で同族は、良く世話されるなら、あらゆる点でより堅固であり、より信頼に値するからです。自ら働く人々の大宗、及び軍隊の自弁〔部分〕

は 2 人 1 組で組織されていること、働く各々のふたりひとくみ同くびき者たちに対する共同の税 *τέλος* のためには、たいていの場合、2 人のうちの 1 人が順番に、一方が 2 人の共同の [カネ] のために働くこと、もう一方が軍役に就くこと（確かに両者にとって、できるかぎりそれが可能な仕方） [と、優れた法は境界を定めるでしょう]。この同じ 2 人は [このやり方によって]、自分たちの家の監督と、公共の事柄のための監督とを達成するものなのです。11. 兵士たちの中で一方で歩兵が、他方で騎兵が、分離的に区別されていること、そして一方で歩兵は、分隊長や部隊長たる役人のもとに分隊 *λόχος* や部隊 *τάξις* へと組織されていること、他方で騎兵は、騎兵隊長や大隊長 [たる役人のもとに] 騎兵隊 *ἄλη* や大隊 *σύνταγμα* へと組織されていること³、その結果それらは、必要なところではいかなる所でも、鋭敏にかつ秩序だって臨戦すること [となる]、 [と、優れた法は境界を定めるでしょう]。また、同時に 2 つの軍隊を、すなわち陸軍と海軍とを、養うのでなく、つねにこれらのうちの 1 つの軍隊を養うこと、 [そして] もし都市や種族ポリςの本性、さらに国土の本性が許容するのなら、両方の各々の軍隊について劣っており両方の各々の軍隊についてしばしば負かされること
が不可避となるであろうよりも、むしろ陸軍を養うこと [と、優れた法は境界を定めるでしょう]。陸軍を、船主たちや他の卑しい人々の技術によってでなく、（将軍であれ兵士であれ）善き男たちの卓越性のゆえに勇敢さとすること、また、地を支配する者たちが、外国から [のものを] 必要とするのでなく自分自身から、必要なものに富んでいること、また、多くの沿岸の地から離れている者たちが、全的な災難 *ἀνάγκη* の場合を除いて、近隣者たちとの戦争にだけ大いに注意するのであって、近隣者たちとの、また同様に外国からの者たちとの——そしてこれらの人々の中には、予期されざる人々がいいます——、多くの [戦争] に注意するのではないということ。これらすべてはもう一方の事々よりも、まあ遙かに良く、遙かにましであります。

12. 貢納の種類は三重なので——最小部分にまで分割すると——、一方で徭役 [=庸?]、他方で金銭（現ナマであれ他のいかなるものであれ）の固定した標準 [=租?]、また他方で産物の明記された分 [=調?]、です。担う者たちにとって徭役は貢納の中で最も重く、多くの奴隸的なものを有し（なぜなら、金銭でなく身体に降りかかり、行なわれるもののために少なからぬ従事の

³ 底本にある *ὥστε* の直前のピリオドをコンマとし、すぐ下の行の *δέοι* のあとのコンマをピリオドとした。

原因となるので)、来たるべき年に、また過ぎ行く(?)年に[要するに毎年毎年]、仕事のためにつねに必要となるものです。他方で金銭の固定した標準は、奴隸的なものに加えて、これもまた非常に多くのものを有し、そして担う者たちの不均等なものを必然的に有し⁴、また往々にして諸々の力[すなわち担税力]に比例しておらず——公職[者の側] ἀρχήが貢納を各々の力[すなわち担税力]に等しくすることが困難なので、また同時に、各々の力[すなわち担税力]が同じところにとどまり続けるであろうわけではないので——、また少しずつ、1年のうちに頻繁に、かつ大勢によって徴収され、遙かに一層困難であるだろう[、そういう貢納です]。他方で産物の明記された分は、奴隸的なものをより少なく有し、この貢納は、等しいものを[徴収することが]できるであろう他のいかなる貢納よりも遙かに軽く、季節の最も容易な時に、[すなわち]地からの産出物の収穫が各々に在る時に、そして[収穫物として]存在する物自体からつねに徴収され、さらに貢納の中で最も均一で、担う各々の人の力[すなわち担税力]につねに比例しており、その結果、これは貢納の中で、我々が述べたように最も軽いので、最良であり、また、最も均一で最も有利なものとして、最も正しい分で国家によって徴収される[、そういう貢納です]。

どのような分が比例的に最も正しいだろうかということは、[次に述べる]この点から計算することが可能です⁵。13. 地からの産出物には、産出のために次の3つが必要です。すなわち働き[つまり労働]、働くであろう者がそれを手段として働くであろうところの費用^{ものいり}τέλος、[すなわち]牛、ぶどう畑、家畜、及びそのたぐい、そしてこれらのものの監督です。その結果、それらも正当に3者に帰属するでしょう。[その3者とは]すなわち働く者たち、それら仕事に費用[上で言った意味での]を提供する者たち、そして第3に、全体の監督者及び救済者であり、その人々[つまり第3の区分に当たる人々]が皇帝たち、支配者たち、他の役人たち、兵士たちだと我々は述べました。そこで、自らの費用で[つまり自弁して]働く人々である自ら働く人々は、地のどこでどのようにして働きたいかについて彼らには権限があるので、2つの分、すなわち一方で働きに帰属する分、他方で費用に帰属する分、を有しており、第3の分を国家と、全体の監督を託された人々とに支払うこと、[そして]他のいかなる貢献からも(比例に相応しないゆえに)労役からも免除されること、そしてこ

⁴ 底本にある ἀναγκαίως の直前のコンマは無視した。

⁵ 底本の ἐστὶν を ἔστι (it is possible, + inf.) と読み改めた。

のような「貢納」が最も正しい〔、と我々は述べます（ということか？）〕。公共の労役に割り当てられた人々にとって、貢納は相応なほうびであり、同時に食いぶちとなる〔、と我々は述べます（ということか？）〕。

さて、諸々の貢納については以上です。14. 生活の仕方は、他の都市民たちにとって、また特に役人たちにとって、カネのかかるものでなくほどほどのものであること、そういう人々は異国の衣服や他の空しい物や無用な物を軽んじること、そしてすべての人は戦争へと割り当てられ、そしてここ〔すなわち戦争という目的？〕に通じる準備に対して配慮すること〔、と我々は述べます（ということか？）〕。出費がどこか別の方面に蕩尽されるなら、それら準備が少なくなり、より弱くなることは必然です。地方からの産出物を、いかなるところへであれ、誰かが欲するとおりに、輸出することは許されない〔、と我々は述べます（ということか？）〕——少なくとも外国人の中の同盟者たちに半分だけ輸出したい者以外には。〔許されるこの場合とは、〕外国人たちが都市民たちよりも2倍の必要（より少なくない必要〔つまり困窮〕）のうちにある場合と異なる時には、彼ら〔外国人たち〕が全く悩まされてしまうことのないために、です。但し、もし必要ならば、鉄と、また武器と、またつまりもし極めて必要な物のうちの他の物と引き換えに輸出することは、何ら税支払いをすることなしに許される〔、と我々は述べます（ということか？）〕。容易に悪くなる〔変造が容易な、ということか？〕貨幣や、また外国の貨幣を、使わないこと、さもなければ、悪しき政体や他人の物である政体を使っているように映じるだろう〔、と我々は述べます（ということか？）〕。というのも、貨幣を集める〔或いは「統合する」〕ことは、政体のために卑しからざる一部分でもあるからです。罪を犯した者たちの手や足を切断して異常な刑罰や野蛮な刑罰をするのではなく、別な仕方で罰すること⁶（そしてそれは、当の処罰行為が罪に対して相応であるためです）、その結果、懲らしめられた者たちも、今後罪を犯すことが最も少ないでしょう〔、と我々は述べます（ということか？）〕、というのも、このようにして矯正不能に見える者は、〔死刑に処せられることによって〕生から離れて身体（この身体を良く用いないということ、を、当の者は知っていたのです）から魂を自由にするほうが、不具になった者たちが障害を負った無用な身体自体に、また都市にも、縛られることを強制するよりも、遙かに良いからです。

⁶ ここで示唆されている刑罰は死刑であるように思われる。

15. そしてこれらやこのような他のものが、より偉大なものもより卑小なものも、優れた政体の法であり、それらすべての中の主要なものは、神格 τὸ θεῖον の思念 δόξα に関することどもが公的にも私的にも正確に探究されることであり、そして特に以下のものが 3 つにして最も決定的です。まず 1 つには、存在する諸々のものの中には神格が、万物より卓越した本質として存在するということであり、第 2 に、この神格は人間たちに対して気づかひもするということ、そしてすべての人間的なことは、より偉大なこともより卑小なことも、この神格によって取り扱われるということであり、第 3 に、[この神格は] 自らの見解に従って各々のことをつねに正しくそして公正に取り扱うということ、各人にかかわる義務から決して離れず、したがって別様ではなく、人間たちの贈り物や他の諸々の物によっておだてられたり欺かれたりすることもなく、ということ。というのも実際、[この神格は] 人間たちを必要としないからです。このようである人間たちに伴うのは、神格に対する儀礼、犠牲、ほどほどの（また、敬虔な考えに由来する）供物、を執行すること τελεῖν であり、諸々の善が、上述のもの [すなわち神格] に対する告白のしるしなのであって、[そういうものとして] 我々にはある [という] ことであり、[そして] 或いは不敬の 2 つの種類を、或いは少なくとも上述の 2 種類のいずれか 1 つを、欠く者たちは、責めを負っているので (?) 栄光 δόξα をもたらさないということであり、初物や供物（もはや初物でなく、購入されたものとして）の高価さによって一層大きなことをしようとして、出費の過剰によって自分の家と国家とをだめにする者たちは、栄光 δόξα をもたらさずに、不敬の第 3 の種類の責めを負っているということであり、このような観念が私的にまた共同的に慣習的であるならば、かつ優勢であるならば、そのような観念によってすべての人に徳が伴うこともまた決して不可能ではありません——そのような人々のもとでは、優勢となったそれら観念が、良美^{りようび}καλόν へのあらゆる熱情をも獲得するでしょう。

16. 人間たちにとって、あらゆる悪 κακία と大いなる諸々の罪とは、反対の諸観念から生じます。つまりつねに、人間たちのうちの或る者たちはこれらに関して不健全な者となるのであって、或る者たちは、存在する諸々のものの中に神格は全然存在しないと考えており、他の者たちは、[神格は] 存在するが人間的なことの何事にも顧慮しないと考えており、他の者たちは、[神格は] 存在し気づかひもするが、なだめられることが可能であり、犠牲や供物や祈りによって籠絡されて、公正なことをそのつど正確に探究しないと考えています。

つまり、神格に関する観念のこれら 2 つの互いに対立する種類から、2 つの泉からのように、お互いに対して極めて対立する 2 つの、生き方の原理が登場します。一方は、良美 ^{りょうび}καλόν だけを、或いは特に良美 ^{りょうび}καλόν を、善 ^{りょうび}ἀγαθόν とみなす人々のものであり、他方は、快楽を人生の終極とする人々のものです。つまり、ギリシア人のうちであれ蛮人のうちであれ、少なくとも理性を分有する限りのすべての者たちにそう思われているように、人間は神的本質と可死的本質から成る複合的な本性だからでして、そして一方で、その人間の神的なものとは魂であり、他方で可死的なものとは身体であり、一方の人々は、もし自分たちの中で優勢となった神的なものによって惹かれて、同族的な [つまり神的な] 本性に関する諸観念を正確に探究したならば、そして徳と良美 ^{りょうび}καλόν を人生全体の指導者としたならば、人間たちの間であらゆる善を完成させるのであり、他方の人々は、もし自分たちの中の可死的・獸的なものによって支配されて、神格に関する諸観念の点で過ちを犯したならば、そして快楽に人生の全部を与えたならば、またもやあらゆる仕方ですべての悪 ^{りょうび}κακά を完成させるのです。これら [両方の] 人々には、間にまたもや、栄光について熱心だった人々もいれば、金銭について熱心だった人々もいます。一方で栄光は徳と良美 ^{りょうび}καλόν との影像 ^{りょうび}εἰδωλον なのであり、他方で金銭は諸々の快楽への準備なのです。

17. そこで、良美 ^{りょうび}καλόν について熱心だった人々の中の或る人々はいつの時代にもいたのでして、かつてはアンフィトリュオンの息子ヘラクレス、彼は諸々の良美 ^{りょうび}καλόν に対する良い秩序と羨望とをギリシア人の種族に惹起し、予め多くの労苦や闘いによって自らに徳を得させたことによって、[自分を] 居住世界の中で最も高名な者にした、と我々は言うております。また、ラケダイモン人リュクルゴス、彼は、王である兄弟がとかくするうちに子なしで死んだあと、その妻が、[自分は] 妊娠していると気づいて、自分との結婚の場合には胎児を墮胎して王位を彼 [リュクルゴス] に得させようと約束した時、そのような行ないを許容せず（それが彼に対して正しい仕方で行なわれていなかったの）、むしろ兄弟の子にあらゆる手管で生きることを得させ、父祖伝来の贈り物を [その子に] 復しめ、次いで少しのちに都市 ^{ポリス}によって立法者に選ばれ、そして都市 ^{ポリス}のために、万人によって賞賛される政体を樹立し、当の都市 ^{ポリス}を、ギリシア人の間でも蛮人の間でも、諸都市 ^{ポリス}の中の最も高名な都市たらしめました。また、マケドニア人の王アレクサンドロス、彼は、卓越性と思慮のゆえにギリシア人たちに対する支配権を得、ギリシア人にもマケドニア人にもアジアに対する支配権を得させました。また、蛮人たちの中ではペルシア人キュロス、彼

は自らの卓越性ゆえに、自らの都^{ポリス}市民であるペルシア人たちをメディア人の隷従から解放し、かつペルシア人たちを、この人々や他のアジアに対する支配者たらしめました。18. 異なる人々のうちの他の人々、及びプリアモスの子にしてイリオン人⁷アレクサンドロス、彼は、神々に対する判断——すなわち、諸々の生き方の中の選択——において、[片や]徳の見張り手たる女神であるヘラを無視し、片や栄光を導いてきた[女神である]アテナを無視し、アフロディテをまさに快樂の女神としてえり好みし、かつわざわざ選びました。したがって、ヘラによって与えられる王位をないがしろにし、アテナによって[与えられる]有徳な至福の生き方や諸々の戦争に対する強さを[ないがしろにし]——名声を愛する生き方は栄光にかかわるものでもあるのに——、テュンダレオスの娘にしてアトレウスの息子メネラオスの妻であるラコニア女ヘレネを、この正しからざる判断に対する贈り物として得て——まさに快樂の頂きだとして、一方で見^み目^めでは当時の女たちの中で最も美しいと思われており、他方で魂の点では別して極めて無恥にして姦婦だったのでして——、この女に随伴する形で彼は同時に自分自身と祖国とを合わせて失いました。また、アッシリア人サルダナパロス [=アッシュルバニパル]、彼は、柔弱と奢侈ゆえに、自分の同^{ポリス}国人であるアッシリア人たちの、アジアに対する支配権を破壊し、メディア人たちに屈してしまっていたのです。また、ローマ人の中ではネロ、彼は、他の諸々の恐るべきことや忌まわしきことをしでかし、自分の母親を殺したのち、ついには自分自身を悪しきものとして醜悪な仕方^{きん}で合わせて滅ぼしてしまっていたのです。つまり彼は、一方で祖国を顧みなかったのであり、他方で、なお当時のローマ人たちの卓越性ゆえに、祖国をだめにするにはできなかったのです。

19. また、君侯たちや私人たちの中の他の多くの人々はつねにこのような部分に属しており、たぶん[人によって]より大きな過ちを犯したり、より小さな過ちを犯したりしているのでして、その中には次のような人々もいます。すなわち彼らは、一方で公正や真理や共通の善を、影にして名目だとする異なる考えを有しており、他方で^{きん}金やこのようなその他諸々に対しては口をあぐり開けており、衣類や銀や^{きん}金や一日おきの安逸さや奢侈によって幸福を測り、自分たち自身と同時に子どもたちの、また祖国全体の、安全や自由を何とも思いません。他方、次のような人々もいます。[すなわち]彼らは、事柄が^{きん}金やそ

⁷ 底本の δ Ἰλιεύς の δ は、ELLISSEN, p. 76 に従って ó と改めた。

のようなものから無縁である限り、そして自分たちが〔事柄を？〕それ自体に即して眺める限り、公正と真理とのために極めて恐るべき弁論家なのですが、金や金に相当する他のものが彼らに垣間見える時には、直ちに舌にかせがはめられ、口にかんぬきが掛けられ、公正に対して彼らは黙り込んでしまい、かの恐るべき弁論全体は反対のものへと転化してしまいます。つまり、これらの人々やこのような人々によって取り扱われることによって、諸々の都市は、極めて優れた確立した諸々の法が有効でなく、みな無益に区別不能でごたまげにされているだろうから、そのつど按配がまずいのです。諸々の都市にはそのつど、優れているだけでなく有効でもある諸々の法が必要なので、法が有効でなければ、最も優れた法ですら何ら有用でなく、或いはごくわずかしかが有用でないのであり、他方、法は、役人たちの徳ゆえに有効なものとなるのであって、その徳はまさに、特に敬虔 θεοσεβεια の〔上述の〕3つの最も有効な種類に由来するのだ、と我々は申しました。20. 少なくとも現在の状況において我々には、安寧 σωτηρία そして救われること、これらほどに必要なことは他にないので——というのも我々には、我々の国家 πράγματα がローマ人の至大なる支配権からどこへ立ち至ったかがわかっているからです。あらゆるものが失われて、我々の国家に残されたのは、トラキア方面に 2つの都市のみ、そしてペロポネソスで（それは十全ですらありません）、また一体何かあるとすれば、なお小島〔程度でしかありません〕——、以下のことが貴殿の務めに属することになります。すなわち、諸々の都市を救うことは、優れた政体以外の何からも帰結しないだろう、ということを我々は申しました。そもそも我々は政体を、最も優れた諸々の法と、有力者たちの中の最良の役人たちとによって、矯正しなければならない〔、ということをお我々は申しました〕。つまり、我々の国家がまずくなってしまうほど、また、最弱の我々が戦士たちの中の最強の者たちと対峙するということが出来ればするほど、〔我々には、〕国家の弱さを均すことができるよう、可能な限り優れた政体を対置することが必要なのです。

いかに多くのことを通じて、またどのようなことを通じて、極めて優れた政体が成るか、ということをお我々は既に申しており、国家の現在の必要に対する最も時宜にかなったことども、それ自体が最も有用なのだ、と提示してきました。それらのことどもは不可能でもなければ、非常に難しいわけでもありません。というのは、当のことどもにとって、それらが成ったり全然成らなかつたりすることが一箇の魂にかかっている、そういうことどもは、不可能でもなけ

れば非常に難しいわけでもないからです。21. そして、そもそも一箇の魂とは、私は特に貴殿の魂のことを言っています。つまり、もし神が、我々の支配者であられ我々の間で最大の力をお持ちである貴殿に、人生において偉大なことや良美なことを成し遂げることへの欲求を吹きかけたのであれば、徳と良美に関するかの学派に真正かつ真率に属しておられる貴殿にとって、これらのことが形をとることは困難でなく⁸、我々の安寧はもはや希望なしでなく、むしろすべてはこのことの中に存し、そして我々の国家が救われ或いは滅びることは、このことにかかっているのです。というのも、もし貴殿が、人生においてあらゆる偉大なこと、あらゆる良美なことを成し遂げようと追求なさるのであれば、貴殿は、[ギリシア人の] 種族を救うこと、そして現在[我々がその中にあるところ] の状況に基づいて王国を確かにすること以上に、より偉大なこともより良美なことも、容易には見いだされないでしょうから。優れた政体を[まず] 確立した者以外では、[王国を] 確かにすることはできません。また、この極めて優れた政体——既にいつの時代にも、良い法を有する諸都市^{ポリス}は特にこの政体を用いました——は、我々が今しがた詳述してきたこの仕方による以外では、成立しないでしょう。

22. もし貴殿ご自身がおぼし召しになり、この見解[の立場]へと赴かれるなら、貴殿は[事の] 遂行に加わる者たちを難儀なしにお持ちになるでしょう。一方で、比較的有用な者たちのうちの年長者たちを公務へとお用にになり、他方で他の人々を、説得と親切と処罰とによってお正しになり、これら両者を、理性に従って、良美に対する欲望と、過ちを犯す者たちに対する怒り *θυμός* とによって、お用にになるのです。欠如している諸々の善を獲得するのは、[それら善の獲得を] 欲望したのちにそれらに取り組む以外には可能でない、というのと同様であり、また、現存する諸々の善を守護するのは、理性に傾聴する怒り *θυμός* を用いる以外には可能でない、というのと同様です。

そして政府の営みの第 1 として、もしそれが良いとお考えなら、助言者たちに関することからお始めになり、この人々を、貴殿ご自身や他の人々やそして大勢にとって、我々が申したように可能な限り有能な人々として任命なさいませ。というのも、そこから始めることが、大勢にとってみても良いことであるように見えるからです。そもそもこうして彼らに、現存する様々なものを動か

⁸ この訳し方の場合、原文は *οὐ χαλεπὸν ταῦτα ξυστῆναι* と単数形でなければならないが(実際の原文では下線部は中性複数の *χαλεπὰ*)、直後の *ταῦτα* (中性複数形)に引きずられて複数になったと解釈した。

し修正することをお教えになり、大いなる危機において我々にとって、我々の国が救われることほどに必要な他のことはないのだ、ということをお教えなさいませ。このことは、かつて政体を修正しなかった人々には可能ではありません。実際、ありきたりの食餌が有益でない場合、人々は病むのであり、これを放擲してもっと有益な食餌を追求する以外には、恐怖を緩和する他の仕方は存在しないのです。23. 次にペロポネソス人を、軍務に就くことになる者たちと、土地税を支払うことになる者たちとに、（各々がより一層役だつように見える、そういう仕方）で分割して、その結果、同じ人々が軍務に就くことになりかつ同時に貢納を徴収されることになる、ということがもはやなくなる、そういう仕方、軍隊の大部分を徹底的に浄化なさいませ。というのも貴殿は、敵どもを上回らなければ、ご自身と同時に種族とを救うことはおできにならないだろうからであり、人数の多い軍隊よりもむしろ好意的で士気ある軍隊を保有しているのであれば、敵どもを上回ることはおできにならないだろうからです。そして、貢納を徴収される軍隊が士気と同時に好意とを保つことは全く困難であり、むしろ、貢納を徴収される兵士たちの多くの士気と好意とが消失することは必然です。24. また、役人たちを小売商である者たちから徹底的に浄化すること、そして今後すべての〔役人である〕者たちに、小売商でもなければ商人でもなく、むしろこの点自体で実際に役人であるのだと命じること、これらが必要です。〔つまり役人たちは、〕大勢の守護と安寧とのために大勢を導くのであり、もし悪しき奉仕者たちが不正な秤で、また可能なあらゆる仕方、憐れな（自ら働く人々）の状況に対して不当な仕打ちを加えても、〔役人たち自身は〕奉仕的な営みを営まないのです。またもし、小売商から公職へと押しやられた⁹人々がいるなら、この人々もまた、何らか有用な人々に見えるとしても、小売商たることを疾うに已めた上で公職に就くか、公職から追放されてしまうか、いずれかが〔必要です〕。というのも、こういったことが弁別されおらず、むしろ小売商が役人と混ぜられてしまっていること、兵士たちがヘロットであること、安寧 *σωτηρία* に関わることもどものがヘロットにかかっていること、これらは、決して偉大なこと或いは良美なことを何ら成し遂げなかった極めて劣悪な政体に属する事柄だからです。少なくとも我々は、高貴な馬たちの仕事へとろばを使うことはせず、高貴な馬たちをろばの仕事へと使うこともせず、また思うに、馬たちですら、我々は両方の側に同じ馬を使うのでなく、一

⁹ *παρωσομένοι* (< *παρωθέω*) の訳。Blum は「hinaufbefördert werden」と訳している。

方で戦争向きの馬を、他方で荷物運びの馬を、[という具合に] 別々に使います。そもそも、遙かに優れて人間の場合にも、このようなことどもを弁別して混同しないようではなければなりません。25. そして多くの貢納を、また少しずつの不規則なこれら貢納を廃棄して、すべての代わりに、生み出されるものの第3の分であって、納付することになる者たちにとって極めて軽く、同じ貢納となるであろうものとして国家にとって極めて有用だ、と我々が極めて正しい理屈によって述べたあの貢納を、制定なさいませ。というのは、この貢納ゆえに人は、逃亡することがより少ないだろうからであり、徴収する人々から不正を蒙ることがより少ないだろうからです。それら徴収する人々は、道理にかな適ったごとく、そもそも自分たち自身にとってみても貢納がなるべく大きなものとなるよう、徴収される人々[の側]に可能な限り多くのものがあるように、と欲するでありましょう。そしてまず、このようなヘロットたちのうちの、必要と思われる限りの数の者を貴殿の家のためにとっておくこと[が必要であり]、他の者たちを役人たちと、兵士たちの中の選ばれた者たちとに、各々について貴殿が欲せられる仕方であって欲せられる数だけ割り振ること[が必要です]。割り振ったなら、割り振られた一群のヘロットの割合に応じて[それら役人たち及び、兵士たちの中の選ばれた者たちの]各々に、兵士であって仕える従者たちをも養うことを強要すること、そして無益に公金に耽溺しないこと、また、(敵どもが願うようなことですが)彼らが明らかにこういうことをしでかすことによって、我々の安全のための支出を無益に破壊してしまわないこと[が必要です]。また特に、貴殿ご自身や他の人々の奢侈贅沢を取り除くこと、すべてを戦争への準備に振り向けること[が必要です]——贅沢は、王や支配者やすべての役人よりも、むしろすべての人にふさわしいのですから。つまり、彼らが戦争への準備と異なるところで出費することによって減ばす限りのもの、それと同じだけの自分たち自身の功業を、彼らは減ばし、敵どもから見ても一層容易に見くびれる者となり、自らの友人たちから見ても一層役に立たない者となるのです。26. 自然の次のような諸々の例からご覧なさいませ。鷲は王的なもの、支配者的な鳥だと思われており、その昔ゼウスの聖鳥とみなされており、それにもかかわらず最も多色的カラフルでなく、羽毛の点でも生まれつき金色こんじきではありません。孔雀は、多色的であり金色ですが、本性から見て最も支配者的でなく、また他の多くの鳥は、孔雀より遙かに劣って彩られており、かつ花飾りを施されています。その結果、多色的で金をちりばめられた服やそのたぐいのものに

よって尊大ぶる人がいるならば、その人は、孔雀の美以上には少しも荘厳でないものによって意気昂然としている恐れがあります。

次のことをもご覧ください。すなわち、特にこのような仕方で歩み、現状の中から、ほどほどの服を着てまたその他の中庸な生き方で戦争へと身がまえた人が、一方で敵どもを見くだし、他方で公職及び王国のために勇気を奮うことと、金がちりばめられた服に身を包んだ人が敵どもを恐れて震えることと、どちらがより荘厳で、或いはより心地よいでしょうか。また、貴殿が牧者であったなら、いずれの仕方で乳をお使いになったのでしょうか。すなわち片や、自分自身はほどほどに享受しつつ、獣どもの襲撃に対して群れを助けてくれるよう（一体全体その目的は、牧者たる貴殿にとって、群れが保たれることと、長く果実を享受することとが、可能になることです¹⁰）、勇敢な番犬である犬たちをそれで養うのと、それとも、不注意であって無際限に乳を鯨飲して服にこぼし、他方で勇敢な犬たちの代わりにマルタの犬や狐を、或いは熊を、すなわち獣の中で最も大食で、他方最も見張りのでないものを、貴殿は養われますか（それらによって、また外から襲撃する他のものたちによって、貴殿の群れは速やかに引き裂かれ、失われることとなるでしょう）。つまり私には、貴殿に対して追従と術策を弄する者たちの、或いは、要するにすべてを呑み込むために大口を開けばなしにして、決して欲望を抑制できない者たちの、こういう者たちの似かよった幾人かを、貴殿が養っておられるように見えるのです。

27. ですがもし貴殿が、ご自身のために、また同時に〔ギリシア人の〕残りの種族のために、最も正しいことを行ないたい、最も有益なことを行ないたい、善美なる男にふさわしい真の清らかなる快樂によって優越することを行ないたいのであれば、あらゆる熱意を以てこの快樂へと向かいなさいませ——〔その際、〕全く譲らないことです。また、同じ事どもについて既に先帝のうちの誰かによって、或いは支配者たちのうちの誰かによって、また貴殿ご自身によって、何らか異なる決定がなされていたかどうかを考慮に入れず、また、貴殿が何かをしようとするのが或る人々にとって嬉しくないかどうかを考慮に入れないことです。むしろすべてのものを動かして、みなのア寧へと行き着くように思われるあらゆることを試みることです。ご存じのとおり、医者たちも、他の人々によって決定されたことや、自分たち自身によって既に決定されたこと

¹⁰ ὄμῖν ... παρέχεται は解釈が難しいが、παρέχω LSJ A III. 2. に「impers. παρέχει τινί c. inf., it is allowed」という語釈があるので、この構文でさらに動詞が受動態へと変えられた形だここでは解釈した。

にそのつと忠実であるのを強いらられるわけではなく、むしろすべてのものを動かして、現状の役に立つと思われるいかなることをも惜しまず、切除したり焼灼したり、手や足を全身の安寧のために切り落としたりするので（そういう時があります）。つまり、これらのことのうち貴殿に可能なことは、もしもそもそもなさりたければ、ご自身でなさるように、その他のことは、みな安寧のために同意するよう、最も神的な皇帝である御父上に嘆願なさるように。そして、もし御父上が、〔貴殿が〕このように一途であるのをご覧になれば、この考えと〔貴殿の〕神的な突進とに驚嘆なさって、ひょっとすると容易に、貴殿に対する同意がなされるかもしれません。最も時宜にかなって特に安寧に資すると思われる限りのこれらのことをはや成し遂げたなら、政体の徳と飾りとに必要な限りの他のことどもをも、はや貴殿は造作なく見いだされることでしょう。その結果、万事を通じて、我々の政体が最も優れているものであることをも証明なさるでしょう。次のこともお考えください。すなわち、貴殿に対して我々から、〔賞賛等々の〕褒賞が大きければ大きいほど、それだけ、諸々の忌むべきものの〔もたらす〕一層大きな損害も反対生成するのであり、そして貴殿には、もはやぐずぐずせず、先延ばしにもせず、特にみな安寧を考慮しそれに配慮することがふさわしいのであります。つまり、恐るべきことは身近に迫っているのですから、ぐずぐずすることはもはや許されず、さらに、このようなことを先延ばしにするのは良美でないのです。次のように言う者に、ヘシオドスは卑しからざる近似を示しています。「だからと延ばす男は、いつも貧乏神と戦わねばならぬ¹¹」。

¹¹ヘシオドス／松平千秋訳『仕事と日』、岩波文庫、1986年、60頁（413行）。